

[劇評]

19 世紀ダブリンを現代の世界に接続する ～ *The Sugar Wife*

北 村 紗 衣

エリザベス・クティの *The Sugar Wife* は 2005 年にラフ・マジック・シアター・カンパニーからの依頼で執筆され、ダブリンのプロジェクト・アーツ・センターで初演された戯曲である。この時にアイリッシュ・タイムズ演劇賞の候補となり、スーザン・スミス・ブラックバーン賞を受賞している。本作はアナベル・コミンの演出により、2024 年 6 月 13 日から 7 月 20 日にかけてアビー劇場で再演されることとなった。

The Sugar Wife は 1850 年のダブリンが舞台である。ヒロインのハンナ・テュークリー（シヴォーン・カレン）は敬虔なクエーカーであり、夫のサミュエル（ピーター・ゲイナー）は紅茶やコーヒー、砂糖などを商う事業で成功している。社会活動に熱心なハンナは元セックスワーカーで病に倒れた貧しいマーサ（シーフラ・ニ・エイリ）を支援する一方、以前は奴隷で現在は奴隷制度廃止のための講演活動を行っている黒人女性サラ・ワース（ティエラ・ポーター）と、サラをアメリカ南部で買って解放したヨークシャ出身のアルフレッド・ダービー（クリス・ウェイリー）をダブリンに招聘し、講演会を開催する。サラやアルフレッドとかかわるうち、ハンナは自らの人生に疑問を抱くようになる。

本作はフィクションだが、多くは史実をヒントにしている。アルフレッドは実在する有名なクエーカーの実業家一族であるダービー一家の子孫という設定である。サラはアイルランドで講演を行ったこともある奴隷制度廃止運動家のサラ・パーカー・リーモンドがモデルだと考えられる。サミュエルは東洋趣味のカフェを作りたいと考えているが、これはダブリン市民なら誰でも知っている有名な老

舗で、クエーカーのビューリー族の事業の一部として作られたビューリーズ・カフェをヒントにしているのは明らかだ。ブリテン諸島におけるクエーカーは飲酒の害に対して懸念を抱き、紅茶やコーヒー、菓子など飲酒にかわる嗜好品の取引を推進していたため、ビューリー族をはじめとしてこうした食品産業に積極的に参入し、成功をおさめたクエーカーが多数存在していた。この作品は19世紀半ばのダブリンを歴史に即した形で描き出そうとする作品である。

The Sugar Wife は19年前に書かれた作品でありながら、フェアトレード、グローバル社会における経済格差、ジェンダー、信仰、人種差別といった2024年の世界に直接つながる問題を扱っている。ハンナはクエーカーとして奴隷制度に強く反対する立場をとっており、夫のサミュエルが奴隷労働を伴わない砂糖だけを扱っているものと信じていたが、アルフレッドやサラとの交流を通して夫が必ずしもフェアトレードを貫いていないことを認めざるを得なくなる。ハンナは夫をはじめとするクエーカーコミュニティの人々が、ビジネスや性生活における倫理を厳しく守ることを標榜しているにもかかわらず、自分の利益のために都合が悪いことがらには目をつぶっていることや、男女の間で道徳上のダブルスタンダードが存在することにだんだん疑いを抱き、信仰の揺らぎを感じるようになる。

ハンナと信仰の関係は複雑だ。クエーカーはもともと女性の積極的な宗教活動を重視する宗派であり、ハンナが奴隷制の廃止やフェアトレードなどについて考え、発言できる知的な女性になったのはクエーカーの信仰と文化にもとづいて育てられたからだと言える。一方でハンナはクエーカー的な強い倫理観と真面目さゆえにクエーカーコミュニティにひそむ偽善に気付き、信仰を疑うことになってしまう。アルフレッドやサラのような全く異なる考え方や経験を有する人々に出会えたのはハンナがクエーカーだったおかげだが、それが皮肉にも信仰の揺らぎにつながる様子をこの芝居は丁寧に描いている。

ポール・オマホニーによるセットはシンプルな四角い空間を中心に行っているが、テーブルや棚などの家具、プロジェクションなどを使って大きく雰囲気を変えることで場面ごとにメリハリがつけられている。テュークリー一家の自宅はクエーカーらしい簡素な雰囲気だが、事業用のオフィスは棚に東洋風の扇などの装飾品

[劇評] 19世紀ダブリンを現代の世界に接続する～ *The Sugar Wife* 北村 紗衣

が置かれ、自宅とは対照的な豪華な雰囲気が醸し出されている。リアリティのある自宅の描写に比べると、オフィスは幻想的とも言えるような空間であり、ここで過ごすうちに生まれるハンナとアルフレッドの間の好意は現実逃避的な要素がある感情として提示されていると言える。

演出については、序盤は比較的静かだが、中盤以降、目を見張るような工夫がいくつかある。サミュエルがサラに製糖所を見せる場面では、かつて奴隷としてサトウキビ農業に従事させられていたサラが見ているにもかかわらず、サミュエルがテーブルに散った砂糖を無造作に払い落とす。この場面では大きく砂糖の粉が飛び散るため、人の命が失われるほどの苛酷な労働で得られた成果物であっても資本主義社会の中では軽く扱われることがあるという冷酷な事実が強調されている。

終盤で講演をするサラが、背景に写った海の画像に血まみれの手で大きく赤い線を引くという演出は、奴隷貿易が血と暴力に彩られたものであったことをショッキングに提示している。奴隷制のもとで行われていた虐待はヴィクトリア朝のブリテン諸島の人々にとっては聞くに堪えないほど恐ろしいものであったが、サラがその実態を隠蔽せずに率直に伝えていることが視覚的にも示されていると言える。しかしながらこの後でサラが舞台に出たままサミュエルと話しながら赤くなった手を拭くところは、せっかくの効果的な演出の後であるのにアクションにもたつきが出てしまっていささか流れが悪いように感じられた。一度サラが退場して手を洗ってからすぐ出てくるというような演出のほうがスムーズであり、前の場面のインパクトを弱めなかったのではないと思われる。

全体的には、アビー劇場の *The Sugar Wife* は複雑な題材をうまく処理しており、19世紀のダブリンを地元に密着した形で描きながら現代世界に開かれた内容の芝居として提示している。社会貢献をうたいながら利益のために倫理的に疑わしい行動をとっている企業が跡を絶たない2024年の状況にあまりにも合致した芝居である。さらにはそうした企業の非倫理的な行動を知りつつも安さに負けて商品を買ってしまう消費者の心にも突き刺さる作品だ。

※本劇評は JSPS 科研費 JP23K00410 の助成を受けた研究の成果である。

参考文献

Gough, Kathleen, *Kinship and Performance in the Black and Green Atlantic: Haptic Allegories*, Routledge, 2013.

Kuti, Elizabeth, *The Sugar Wife*, Nick Hern Books, 2024.